お釈迦様の成道

令和四年十二月法話　薬師寺 管主　加藤朝胤

菩提樹下での瞑想
物事をありのままに見、苦悩の起こる原因を徹底的に考え、
取り除いていく
釈尊は、ウルヴェーラー（佛陀伽耶）のアシュヴァッタ樹（菩提樹）
の下で瞑想に入り、悪魔の誘惑を退け（降魔）悟りを開いた（成道）

悟りとは解脱
究極の理想の境地　苦しみ悩む世界から解放された平安な状態
あらゆる束縛開放された自由な境地

束縛とは煩悩
身心を煩わせ悩ませる精神作用の総称
私達の苦悩の原因は縁起を知らないこと（無明）であると見抜いた

縁起　因縁生起　　縁起の道理　縁起の理法
あらゆるものごとは原因と条件（縁）によって生起し、原因・条件な
しによって生起することはない　現象の変化は無原則には起こらない
因とは、原因結果に対する直接の力（直接原因）
縁とは、因をたすけて結果を生ぜしめる間接の力（外的条件）
因と縁との和合
因縁とは宇宙の真理
真理は単純なものでなければ真理ではない
真理は単純なものであるから、万人の心に触れることができる

生起消滅の因果関係　　（此＝因　彼＝果）＝法
此れあるとき彼あり、此れないとき彼なし
此れ生ずるが故に彼生ず、此れ滅するが故に彼滅す
一切の諸法は因縁より生ず、その因縁を如来は説き給う（縁起偈）

十二縁起（じゅうにえんぎ）

①無明（むみょう）　愚痴（おろかさ）あらゆる煩悩の根源となるもの
無知　縁起の道理に暗いこと
②行（ぎょう）　潜在的形成力　迷妄の生活の内容をなす諸行為　業
③識（しき）　識別作用　認識（主体）対象に向かって動く心
眼識　耳識　鼻識　舌識　身識　意識の六識
④名色（みょうしき）　認識対象　名称と形態　肉体と精神　身心
心の対象となる心的（名）・物質的（色）諸現象
心（名）と身体（色）が一体となった固体存在
色　声　香　味　触　法　の六境
⑤六処（ろくしょ）　六種の認識領域＝知覚する機能
感官　心と外界とを行き来する六つの門
眼　耳　鼻　舌　身　意　の六根
⑥触（そく）　根を通しての境と識との接触＝対象を知覚すること
心と外界との接触
⑦受（じゅ）　苦（不快）樂（快）不苦不樂を感受すること
心による外界の感受
⑧愛（あい）　渇愛　渇きのごとき欲望（生きる為には避けられない
固体存在の持つ根源的な欲望）性的な欲望
⑨取（しゅ）　生と死への欲望（生存への欲望の表裏）の愛
執着　自己のものとして取り込む
⑩有（う）　輪廻の生存
⑪生（しょう）　誕生　生まれること
⑫老死（ろうし）　生を受けた者が避けることのできない苦の現実
無常なすがた

原因と結果

舎利弗の帰佛

舎利弗が五比丘の一人である馬勝（アッサジ）から聞いて
佛弟子になる機縁を作った偈文

諸法従縁起　諸法は縁起に従い　諸々の存在するものは縁起より生じるのであり
如来説是因　如来は是の因を説き　如来はその因をお説きになった
彼法因縁尽　彼の法の因縁も尽きる　それら「諸々の存在するもの」も生滅する
是大沙門説　是は大沙門の説なり　偉大な沙門はそのように語られた

《パーリー律　大品》

五比丘

阿若・憍陳如（あにゃ・きょうちんにょ、
アニャータ・カウンディンニャ、コンダンニャ）
阿説示・馬勝（あせつじ、アッサジ）
摩訶摩男（まかまなん、マハーナーマン）
婆提梨迦（ばつだいりか、バドリカ、バッディヤ）
婆敷（ばしふ、ヴァシュフ、ワッパ、ヴァッパ）

此れあるによりて、彼あり　此れなければ、彼なし
此れ生ずれば、彼生じ　此れ滅すれば、彼滅す

《小部経典　自説経　菩提品》

お釈迦様の悟りの原点
原因　結果　縁
縁起（えんぎ）の法則　因縁（いんねん）の法則
因縁生起（いんねんしょうき）の略で、「因」は原因「縁」は条件
縁欠不生（えんけつふしょう）

バラモンの教え　四　姓　平　等　（ヴェルナ）カースト
波羅門（バラモン）　占師
刹帝利（クシャトリア）王族　貴族
吠　奢（ベイシャ）　一般平民
首陀羅（シュードラ）　奴隷

縁起観の原形

『スッタニパータ』第4章「アッタカヴァッガ」（八詩頌章）「争闘」　中村元訳

○争闘と争論と悲しみと憂いと慳みと慢心と傲慢と悪口とは、どこから現れ出てきたのですか？　これらはどこから起こったのですか？　どうか、それを教えてください。
○争闘と争論と悲しみと憂いと慳みと慢心と傲慢と悪口とは**愛し好むもの**に基づいて起こる。　争闘と争論とは慳みに伴い、争論が生じたときに、悪口が起こる。
○世間において、愛し好むものは何に基づいて起こるのですか？　また世間にはびこる貪りは何に基づいて起こるのですか？　また人が来世に関していだく希望とその成就とは、何に基づいて起こるのですか？
○世の中で愛し好むもの及び世の中にはびこる貪りは、**欲望**に基づいて起こる。また人が来世に関していだく希望とその成就とは、それに基づいて起こる。
○さて世の中で欲望は何に基づいて起こるのですか？　また〈形而上学的な〉断定は何から起こるのですか？　怒りと虚言と疑惑と及び〈道の人〉（沙門）の説いた諸々のことがらは、何から起こるのですか？
○世の中で**〈快〉と〈不快〉**と称するものに依って、欲望が起こる。諸々の物質的存在には生起と消滅とのあることを見て、世の人は（外的な事物にとらわれた）断定を下す。怒りと虚言と疑惑、――これらのことがらも、（快と不快との）二つがあるときに現れる。疑惑ある人は知識の道に学べ。〈道の人〉は、知って、諸々のことがらを説いたのである。
○快と不快とは何に基づいて起こるのですか？　また何がない時に、これらのものが現れないのですか？　また生起と消滅ということの意義と、それの起こるもととなっているものを、我に語ってください。
○快と不快とは、**感官による接触**に基づいて起こる。感官による接触が存在しないときには、これらのものも起こらない。生起と消滅ということの意義と、それの起こるもととなっているもの（感官による接触）を、我は汝に告げる。
○世の中で感官による接触は何に基づいて起こるのですか？　また**所有欲**は何から起こるのですか？　何ものが存在しないときに、**〈わがもの〉という我執**が存在しないのですか？　何ものが消滅したときに、感官による接触がはたらかないのですか？
○**名称と形態**とに依って感官による接触が起こる。諸々の所有欲は**欲求**を縁として起こる。欲求がないときには、〈わがもの〉という我執も存在しない。形態が消滅したときには〈感官による接触〉はたらかない。
○ありのままに想う者でもなく、誤って想う者でもなく、想いなき者でもなく、想いを消滅した者でもない。――このように理解した者の形態は消滅する。けだしひろがりの意識は、想いに基づいて起こるからである。